

症例から学ぶ

電解質と体液量管理 のベストアンサー

人類の歴史は感染症との戦いの歴史でもある。この言葉を聞いたことはあったものの、それを新型コロナウイルス感染症のパンデミックとして自分自身が体験するとは正直夢にも思っていませんでした。そして、2022年の1月現在、このパンデミックはまだまだ終息していません。この本の読者の先生方の多くもパンデミックのなかで日々の診療に追われていることと思います。

しかし、このパンデミックのなかにおいても臨床医は常に新しい知見を学び、臨床に還元していく必要があります。また、臨床医は今後の医療の担い手となっていく後進を育てていくという重要な役目もあります。今回、幸運なことにも電解質と体液量の管理についての特集を組む機会をいただきました。

日常診療のなかで適切な電解質と体液量の管理を行うことは極めて重要であり、レジデントの必修分野の1つとなっています。しかし、特に初学者にとっては苦手意識をもちやすいところも少なくありません。そこで本特集では電解質と体液量の管理を専門とし、第一線でご活躍されている先生方に、症例を通して、わかりやすく解説していただくことを企画しました。

症例を通して電解質と体液量の管理について解説をした本は数多くありますが、その多くは適切な管理がなされた症例を通して解説されたものです。しかし、本当に勉強になるのはその管理が適切ではなかった症例にあると考え、本企画ではその管理が必ずしも適切ではなかった症例をご提示いただき、そのあとにベストアンサーというかたちで、ではどうすればよかったかを解説していただく形式をとりました。

具体的には電解質についてはカリウム、ナトリウム、カルシウム、リン、マグネシウムについて、それぞれ、その管理方法をご解説いただきました。そして体液量については心不全、腎不全、肝不全、敗血症などの日常診療で遭遇する疾患につい

て、その管理を輸液と利尿薬の使い方を中心にご解説いただきました。さらに電解質と体液量の管理が必要となるシチュエーションとして、熱中症患者、高齢者、がん患者について、その管理方法をご解説いただきました。また、本特集を通して、成書には書かれていない診療のコツや思考のプロセスなども余すところなく盛り込んでいただきました。

電解質と体液量の管理をこれから学ぶ先生、苦手意識をもっている先生、そしてもう一度学び直したい先生にはぜひ本書を手にとっていただきたいと思います。必ずや本書がお役に立てることができるものと考えています。

今井 直彦

聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院腎臓・高血圧内科